

# 医薬品インタビューフォーム

日本病院薬剤師会のIF記載要領2018(2019年更新版)に準拠して作成

胃炎・胃潰瘍治療剤  
日本薬局方 レバミピド錠  
**レバミピド錠 100mg 「NP」**  
*Rebamipide Tablets*

剤形	錠剤(フィルムコーティング錠)
製剤の規制区分	該当しない
規格・含量	1錠中 日本薬局方 レバミピド 100mg
一般名	和名:レバミピド(JAN) 洋名:Rebamipide(JAN)
製造販売承認年月日 薬価基準収載・ 販売開始年月日	製造販売承認年月日:2009年 1月 8日 薬価基準収載年月日:2009年 5月 15日 販売開始年月日:2009年 5月 15日
製造販売(輸入)・ 提携・販売会社名	製造販売元:ニプロ株式会社
医薬情報担当者の連絡先	
問い合わせ窓口	ニプロ株式会社 医薬品情報室 TEL:0120-226-898 FAX:050-3535-8939 医療関係者向けホームページ: <a href="https://www.nipro.co.jp/">https://www.nipro.co.jp/</a>

本IFは2023年10月改訂の電子添文の記載に基づき改訂した。

最新の情報は、独立行政法人 医薬品医療機器総合機構の医薬品情報検索ページで確認してください。

## 1. 医薬品インタビューフォーム作成の経緯

医療用医薬品の基本的な要約情報として、医療用医薬品添付文書（以下、添付文書）がある。医療現場で医師・薬剤師等の医療従事者が日常業務に必要な医薬品の適正使用情報を活用する際には、添付文書に記載された情報を裏付ける更に詳細な情報が必要な場合があり、製薬企業の医薬情報担当者（以下、MR）等への情報の追加請求や質疑により情報を補完してきている。この際に必要な情報を網羅的に入手するための項目リストとして医薬品インタビューフォーム（以下、IFと略す）が誕生した。

1988年に日本病院薬剤師会（以下、日病薬）学術第2小委員会がIFの位置付け、IF記載様式、IF記載要領を策定し、その後1998年に日病薬学術第3小委員会が、2008年、2013年に日病薬医薬情報委員会がIF記載要領の改訂を行ってきた。

IF記載要領2008以降、IFはPDF等の電子的データとして提供することが原則となった。これにより、添付文書の主要な改訂があった場合に改訂の根拠データを追加したIFが速やかに提供されることとなった。最新版のIFは、医薬品医療機器総合機構（以下、PMDA）の医療用医薬品情報検索のページ（<https://www.pmda.go.jp/PmdaSearch/iyakuSearch/>）にて公開されている。日病薬では、2009年より新医薬品のIFの情報を検討する組織として「インタビューフォーム検討会」を設置し、個々のIFが添付文書を補完する適正使用情報として適切か審査・検討している。

2019年の添付文書記載要領の変更に合わせて、「IF記載要領2018」が公表され、今般「医療用医薬品の販売情報提供活動に関するガイドライン」に関連する情報整備のため、その更新版を策定した。

## 2. IFとは

IFは「添付文書等の情報を補完し、医師・薬剤師等の医療従事者にとって日常業務に必要な、医薬品の品質管理のための情報、処方設計のための情報、調剤のための情報、医薬品の適正使用のための情報、薬学的な患者ケアのための情報等が集約された総合的な個別の医薬品解説書として、日病薬が記載要領を策定し、薬剤師等のために当該医薬品の製造販売又は販売に携わる企業に作成及び提供を依頼している学術資料」と位置付けられる。

IFに記載する項目配列は日病薬が策定したIF記載要領に準拠し、一部の例外を除き承認の範囲内の情報が記載される。ただし、製薬企業の機密等に関わるもの及び利用者自らが評価・判断・提供すべき事項等はIFの記載事項とはならない。言い換えると、製薬企業から提供されたIFは、利用者自らが評価・判断・臨床適用するとともに、必要な補完をするものという認識を持つことを前提としている。

IFの提供は電子データを基本とし、製薬企業での製本は必須ではない。

## 3. IFの利用にあたって

電子媒体のIFは、PMDAの医療用医薬品情報検索のページに掲載場所が設定されている。

製薬企業は「医薬品インタビューフォーム作成の手引き」に従ってIFを作成・提供するが、IFの原点を踏まえ、医療現場に不足している情報やIF作成時に記載し難い情報等については製薬企業のMR等へのインタビューにより利用者自らが内容を充実させ、IFの利用性を高める必要がある。また、随時改訂される使用上の注意等に関する事項に関しては、IFが改訂されるまでの間は、製薬企業が提供する改訂内容を明らかにした文書等、あるいは各種の医薬品情報提供サービス等により薬剤師等自らが整備するとともに、IFの使用にあたっては、最新の添付文書をPMDAの医薬品医療機器情報検索のページで確認する必要がある。

なお、適正使用や安全性の確保の点から記載されている「V. 5. 臨床成績」や「XII. 参考資料」, 「XIII. 備考」に関する項目等は承認を受けていない情報が含まれることがあり、その取り扱いには十分留意すべきである。

#### 4. 利用に際しての留意点

IFを日常業務において欠かすことができない医薬品情報源として活用していただきたい。IFは日病薬の要請を受けて、当該医薬品の製造販売又は販売に携わる企業が作成・提供する、医薬品適正使用のための学術資料であるとの位置づけだが、記載・表現には医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律の広告規則や販売情報提供活動ガイドライン、製薬協コード・オブ・プラクティス等の制約を一定程度受けざるを得ない。販売情報提供活動ガイドラインでは、未承認薬や承認外の用法等に関する情報提供について、製薬企業が医療従事者からの求めに応じて行うことは差し支えないとされており、MR等へのインタビューや自らの文献調査などにより、利用者自らがIFの内容を充実させるべきものであることを認識しておかなければならない。製薬企業から得られる情報の科学的根拠を確認し、その客観性を見抜き、医療現場における適正使用を確保することは薬剤師の本務であり、IFを利用して日常業務を更に価値あるものにしていただきたい。

# 目 次

<b>I. 概要に関する項目</b>	5. 臨床成績	12
1. 開発の経緯	1	
2. 製品の治療学的特性	1	
3. 製品の製剤学的特性	1	
4. 適正使用に関して周知すべき特性	1	
5. 承認条件及び流通・使用上の制限事項	2	
6. RMPの概要	2	
<b>II. 名称に関する項目</b>	<b>VI. 薬効薬理に関する項目</b>	
1. 販売名	1. 薬理的に関連ある化合物又は化合物群	14
2. 一般名	2. 薬理作用	14
3. 構造式又は示性式	<b>VII. 薬物動態に関する項目</b>	
4. 分子式及び分子量	1. 血中濃度の推移	16
5. 化学名（命名法）又は本質	2. 薬物速度論的パラメータ	17
6. 慣用名，別名，略号，記号番号	3. 母集団（ポピュレーション）解析	18
<b>III. 有効成分に関する項目</b>	4. 吸収	18
1. 物理化学的性質	5. 分布	18
2. 有効成分の各種条件下における安定性	6. 代謝	18
3. 有効成分の確認試験法，定量法	7. 排泄	19
<b>IV. 製剤に関する項目</b>	8. トランスポーターに関する情報	19
1. 剤形	9. 透析等による除去率	19
2. 製剤の組成	10. 特定の背景を有する患者	19
3. 添付溶解液の組成及び容量	11. その他	19
4. 力価	<b>VIII. 安全性（使用上の注意等）に関する項目</b>	
5. 混入する可能性のある夾雑物	1. 警告内容とその理由	20
6. 製剤の各種条件下における安定性	2. 禁忌内容とその理由	20
7. 調製法及び溶解後の安定性	3. 効能又は効果に関連する注意とその理由	20
8. 他剤との配合変化（物理化学的変化）	4. 用法及び用量に関連する注意とその理由	20
9. 溶出性	5. 重要な基本的注意とその理由	20
10. 容器・包装	6. 特定の背景を有する患者に関する注意	20
11. 別途提供される資材類	7. 相互作用	21
12. その他	8. 副作用	21
<b>V. 治療に関する項目</b>	9. 臨床検査結果に及ぼす影響	22
1. 効能又は効果	10. 過量投与	22
2. 効能又は効果に関連する注意	11. 適用上の注意	22
3. 用法及び用量	12. その他の注意	22
4. 用法及び用量に関連する注意	<b>IX. 非臨床試験に関する項目</b>	
	1. 薬理試験	23
	2. 毒性試験	23

<b>X. 管理的事項に関する項目</b>		
1. 規制区分	24	
2. 有効期間	24	
3. 包装状態での貯法	24	
4. 取扱い上の注意	24	
5. 患者向け資材	24	
6. 同一成分・同効薬	24	
7. 国際誕生年月日	24	
8. 製造販売承認年月日及び承認番号, 薬価基準収載年月日, 販売開始年月日	24	
9. 効能又は効果追加, 用法及び用量変更 追加等の年月日及びその内容	25	
10. 再審査結果, 再評価結果公表年月日及び その内容	25	
11. 再審査期間	25	
12. 投薬期間制限に関する情報	25	
		13. 各種コード
		25
		14. 保険給付上の注意
		25
		<b>XI. 文献</b>
		1. 引用文献
		26
		2. その他の参考文献
		27
		<b>XII. 参考資料</b>
		1. 主な外国での発売状況
		28
		2. 海外における臨床支援情報
		28
		<b>XIII. 備考</b>
		1. 調剤・服薬支援に際して臨床判断を行う にあたっての参考情報
		29
		2. その他の関連資料
		29

## 略語表

略語	略語内容
Al-P	alkaline phosphatase : アルカリホスファターゼ
ALT	alanine aminotransferase : アラニンアミノトランスフェラーゼ (=GPT)
AST	aspartate aminotransferase : アスパラギン酸アミノトランスフェラーゼ (=GOT)
AUC	area under curve : 血中濃度-時間曲線下面積
BUN	blood urea nitrogen : 血液尿素窒素
C <sub>max</sub>	最高血漿中濃度
CYP	cytochrome P450 (シトクロム P450)
γ-GTP	gamma-glutamyl transpeptidase : γ グルタミルトランスぺプチダーゼ
LC/MS	液体クロマトグラフィー/質量分析法
mRNA	messenger RNA (ribonucleic acid) : メッセンジャーRNA (リボ核酸) 、伝令リボ核酸
NSAID	nonsteroidal anti-inflammatory drug : 非ステロイド系抗炎症薬
RMP	Risk Management Plan : 医薬品リスク管理計画
S. D.	standard deviation : 標準偏差
t <sub>1/2</sub>	消失半減期
T <sub>max</sub>	Time to reach maximum concentration in plasma : 最高血漿中濃度到達時間

## I. 概要に関する項目

### 1. 開発の経緯

レバミピド製剤は、胃の粘膜血流、粘液分泌、粘膜増殖などの“防御因子”を賦活させることにより粘膜を保護し損傷の修復・治癒を促進させる胃炎・胃潰瘍治療剤であり<sup>1)</sup>、本邦では1990年に上市されている。

レバミピド錠 100mg「NP」は、ニプロファーマ株式会社が後発医薬品として開発を企画し、薬食発第0331015号(平成17年3月31日)に基づき規格及び試験方法を設定、加速試験、生物学的同等性試験を実施し、2009年1月に承認を得て、2009年5月に販売を開始した。その後、2013年12月には、製造販売承認をニプロ株式会社が承継した。

### 2. 製品の治療学的特性

○本剤は、プロスタグランジン E<sub>2</sub> の産生を増加させることで、胃粘膜障害の抑制作用を示し、胃粘膜の血流を促して胃の胃酸に対する防御機能を高める<sup>2)</sup>。

○臨床的には、胃潰瘍及び急性胃炎、慢性胃炎の急性増悪期の胃粘膜病変（びらん、出血、発赤、浮腫）の改善に有用性が認められている。

○重大な副作用としては、ショック、アナフィラキシー、白血球減少、血小板減少、肝機能障害、黄疸が報告されている。（「VIII. 8. (1) 重大な副作用と初期症状」の項参照）

### 3. 製品の製剤学的特性

○錠剤に、「一般名」・「屋号」・「含量」を印字している。

○PTPシートの両面には、1錠ごとに「一般名」・「含量」を表示している。

### 4. 適正使用に関して周知すべき特性

適正使用に関する資材、 最適使用推進ガイドライン等	有無	タイトル、参照先
RMP	無	
追加のリスク最小化活動として 作成されている資材	無	
最適使用推進ガイドライン	無	
保険適用上の留意事項通知	無	

5. 承認条件及び流通・使用上の制限事項

(1) 承認条件

該当しない

(2) 流通・使用上の制限事項

該当しない

6. RMPの概要

該当しない

## Ⅱ. 名称に関する項目

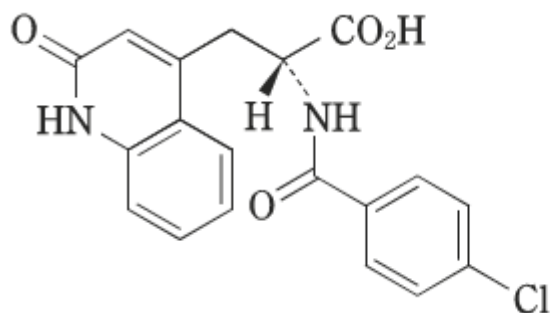
### 1. 販売名

- (1) 和 名 : レバミピド錠 100mg 「NP」  
(2) 洋 名 : Rebamipide Tablets  
(3) 名称の由来 : 有効成分であるレバミピドに剤形及び含量を記載し、NIPRO から「NP」を付した。

### 2. 一般名

- (1) 和 名 (命名法) : レバミピド (JAN)  
(2) 洋 名 (命名法) : Rebamipide (JAN)  
(3) ステム (stem) : 不明

### 3. 構造式又は示性式



及び鏡像異性体

### 4. 分子式及び分子量

分子式 :  $C_{19}H_{15}ClN_2O_4$

分子量 : 370.79

### 5. 化学名 (命名法) 又は本質

(2*RS*)-2-(4-Chlorobenzoylamino)-3-(2-oxo-1,2-dihydroquinolin-4-yl)propanoic acid (JAN)

### 6. 慣用名, 別名, 略号, 記号番号

該当資料なし

---

### Ⅲ. 有効成分に関する項目

---

#### 1. 物理化学的性質

##### (1) 外観・性状

白色の結晶性の粉末であり、味は苦い。  
無臭である<sup>2)</sup>。

##### (2) 溶解性

*N,N*-ジメチルホルムアミドにやや溶けやすく、メタノール又はエタノール (99.5) に極めて溶けにくく、水にほとんど溶けない。

##### (3) 吸湿性

該当資料なし

##### (4) 融点 (分解点), 沸点, 凝固点

融点: 約 291°C (分解)

##### (5) 酸塩基解離定数

該当資料なし

##### (6) 分配係数<sup>3)</sup>

pKa: 3.3 (25°C)

##### (7) その他の主な示性値

*N,N*-ジメチルホルムアミド溶液 (1→20) は旋光性を示さない。  
乾燥減量: 3.0%以下 (1g、105°C、2 時間)<sup>2)</sup>。  
強熱残分: 0.1%以下 (1g)<sup>2)</sup>。

#### 2. 有効成分の各種条件下における安定性

該当資料なし

#### 3. 有効成分の確認試験法, 定量法<sup>2)</sup>

確認試験法

日本薬局方の医薬品各条の「レバミピド」確認試験法による。

定量法

日本薬局方の医薬品各条の「レバミピド」定量法による。


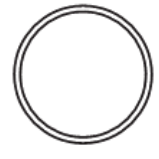

## IV. 製剤に関する項目

### 1. 剤形

#### (1) 剤形の区別

錠剤（フィルムコーティング錠）

#### (2) 製剤の外観及び性状

販売名	外形・大きさ			性状
	直径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (mg)	
レバミピド錠 100mg「NP」				白色のフィルム コーティング錠
	8.1	3.4	175	

#### (3) 識別コード

該当しない

#### (4) 製剤の物性

該当資料なし

#### (5) その他

該当しない

### 2. 製剤の組成

#### (1) 有効成分（活性成分）の含量及び添加剤

販売名	有効成分	添加剤
レバミピド錠 100mg「NP」	1錠中 日本薬局方 レバミピド 100mg	結晶セルロース、低置換度ヒドロキシプロピルセルロース、ヒドロキシプロピルセルロース、ステアリン酸マグネシウム、ヒプロメロース、マクロゴール 6000、酸化チタン、カルナウバロウ

#### (2) 電解質等の濃度

該当資料なし

#### (3) 熱量

該当資料なし

### 3. 添付溶解液の組成及び容量

該当しない

### 4. 力価

該当しない

5. 混入する可能性のある夾雑物

該当資料なし

6. 製剤の各種条件下における安定性

加速試験<sup>4)</sup>

試験条件：40±1℃、75±5%RH

PTP包装：包装形態（ポリ塩化ビニル・アルミ箔）

項目及び規格	開始時	1 カ月	3 カ月	6 カ月
性状（白色のフィルムコーティング錠である）	適合	適合	適合	適合
確認試験	適合	適合	適合	適合
製剤均一性試験	適合	—	—	適合
溶出試験	適合	適合	適合	適合
含量（95.0～105.0%）	100.7	101.6	100.0	100.9
	100.7	101.9	100.0	100.1
	101.4	101.1	100.3	100.1

1ロット（n=3）、3ロット

バラ包装：包装形態（ポリエチレン瓶、ポリエチレンキャップ）

項目及び規格	開始時	1 カ月	3 カ月	6 カ月
性状（白色のフィルムコーティング錠である）	適合	適合	適合	適合
確認試験	適合	適合	適合	適合
製剤均一性試験	適合	—	—	適合
溶出試験	適合	適合	適合	適合
含量（95.0～105.0%）	100.7	101.2	99.4	99.7
	100.7	100.4	99.8	99.1
	101.4	101.2	100.1	100.0

1ロット（n=3）、3ロット

長期保存試験<sup>5)</sup>

試験条件：25℃、60%RH

PTP包装：最終包装形態（内包装：ポリ塩化ビニル・アルミ箔、外包装：紙箱）

項目及び規格	開始時	12 カ月	24 カ月	36 カ月
性状（白色のフィルムコーティング錠である）	適合	適合	適合	適合
確認試験	適合	—	—	適合
製剤均一性試験	適合	—	—	適合
溶出試験	適合	適合	適合	適合
含量*（95.0～105.0%）	99.7	100.2	100.6	100.0
	100.6	99.7	99.9	99.1
	100.8	100.1	100.8	101.6

1ロット（n=1、\*：n=3）、3ロット

バラ包装：最終包装形態（内包装：ポリエチレン瓶、ポリエチレンキャップ、外包装：紙箱）

項目及び規格	開始時	12 カ月	24 カ月	36 カ月
性状（白色のフィルムコーティング錠である）	適合	適合	適合	適合
確認試験	適合	—	—	適合
製剤均一性試験	適合	—	—	適合
溶出試験	適合	適合	適合	適合
含量*（95.0～105.0%）	99.7	100.9	100.8	100.8
	100.6	99.3	100.0	98.9
	100.8	100.6	100.7	101.3

1ロット（n=1、\*：n=3）、3ロット

最終包装製品を用いた長期保存試験（25℃、相対湿度 60%、36 カ月）の結果、通常の市場流通下において、3 年間安定であることが確認された。

無包装状態での安定性<sup>6)</sup>

『錠剤・カプセル剤の無包装状態での安定性試験法について（答申）』における試験法を参考にし、同評価基準に従い評価した結果は以下の通りである。

試験条件：温度 40℃、3 カ月（保存形態：遮光・気密容器）

湿度 75%RH/25℃、3 カ月（保存形態：遮光・開放）

光 60 万 lx・hr（保存形態：透明・開放）

試験結果：

保存条件	外観	含量	硬度 (19.6N 以上)	溶出性
〈開始時〉	白色のフィルムコーティング錠	98.5% (適合)	130.5N (適合)	適合
温度	変化なし	変化なし	変化なし	変化なし
湿度	変化なし	変化なし	変化なし	変化なし
光	[60 万 lx・hr] わずかに黄色味を帯びる色調の変化が見られた	変化なし	変化なし	変化なし

試験回数（溶出性：1 回、外観・含量：3 回、硬度：10 回）

## 7. 調製法及び溶解後の安定性

該当しない

## 8. 他剤との配合変化（物理化学的变化）

該当資料なし

## 9. 溶出性

溶出挙動における類似性<sup>7)</sup>

(「後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン:平成9年12月22日 医薬審第487号、平成13年5月31日一部改正 医薬審第786号」、平成18年11月24日一部改正 薬食審査発第1124004号)」

試験方法：日本薬局方一般試験法溶出試験法（パドル法）

試験条件

装置	回転数	試験液	試験液量	温度	製剤の投与数
パドル法	50rpm	pH1.2 = 日本薬局方溶出試験第1液	900mL	37 ± 0.5°C	1錠/ 1ベッセル
		pH5.5 = 薄めた McIlvaine の緩衝液			
		pH6.8 = 日本薬局方溶出試験第2液			
		水			
	100rpm	pH5.5 = 薄めた McIlvaine の緩衝液			

判定基準：試験製剤の平均溶出率を、標準製剤の平均溶出率と比較し、すべての溶出試験条件において、以下のいずれかの基準に適合するとき、溶出挙動は同等であると判定する。

1) 標準製剤の平均溶出率が規定された試験時間以内に 85%に達する場合

①標準製剤が 15 分以内に平均 85%以上溶出する場合：

試験製剤が 15 分以内に平均 85%以上溶出するか、又は 15 分において、試験製剤の平均溶出率が標準製剤の平均溶出率 ± 15% の範囲にある。

②標準製剤が 15～30 分に平均 85%以上溶出する場合：

標準製剤の平均溶出率が 60% 及び 85% 付近の適当な 2 時点において、試験製剤の平均溶出率は標準製剤の平均溶出率 ± 15% の範囲にある。又は、f2 関数の値は 45 以上である。

③上記以外の場合：

標準製剤の平均溶出率が 40% 及び 85% 付近の適当な 2 時点において、試験製剤の平均溶出率が標準製剤の平均溶出率 ± 15% の範囲にある。又は、f2 関数の値は 45 以上である。

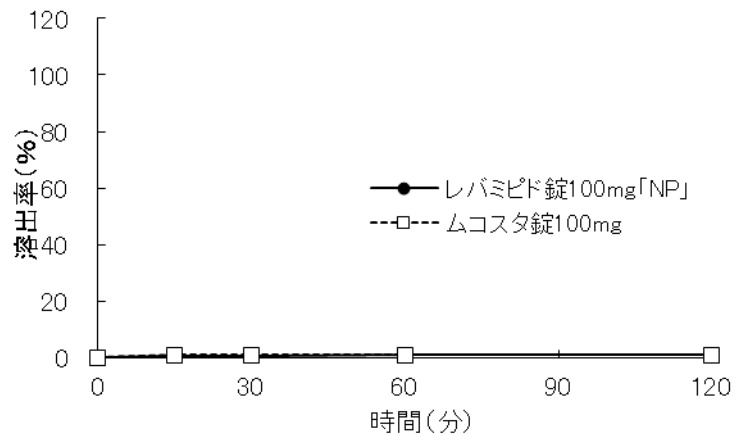
2) 標準製剤の平均溶出率が規定された試験時間以内に 85%に達しない場合

標準製剤が規定された試験時間における平均溶出率の 1/2 の平均溶出率を示す適当な時点、及び規定された試験時間において、試験製剤の

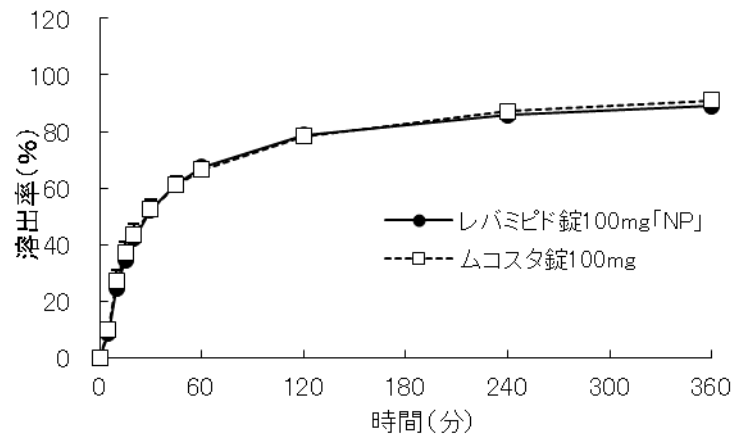
平均溶出率は標準製剤の平均溶出率 $\pm a\%$ の範囲にある。aは、溶出率が50%以上の場合には15、50%未満の場合には8とする。又はf2関数の値は溶出率が50%以上の場合には50以上、50%未満の場合には55以上である。

試験結果：同等性試験ガイドラインに従ってレバミピド錠 100mg「NP」と標準製剤（ムコスタ錠 100mg）の溶出挙動を比較した結果、全ての条件において両製剤の溶出挙動は同等であると判断された。

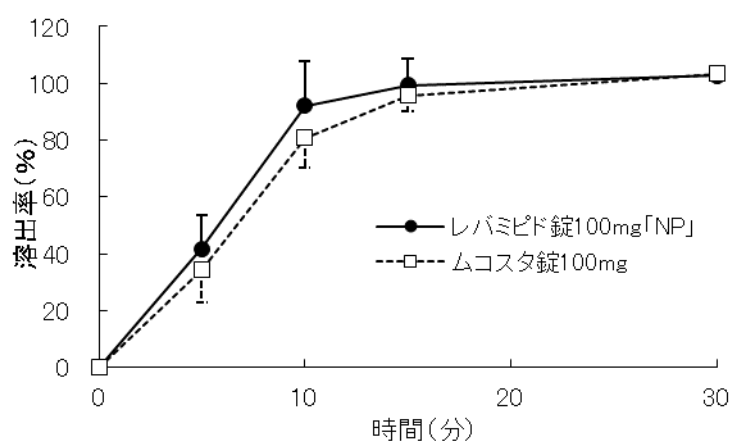
試験液 pH1.2 (50rpm) における平均溶出曲線 (mean $\pm$ S. D.、n=12)



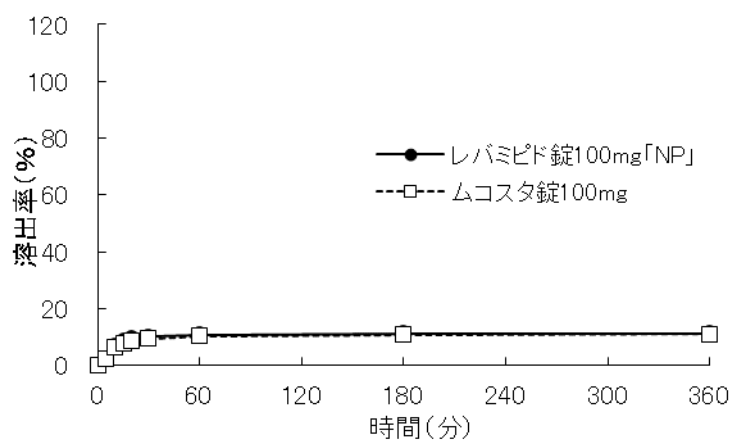
試験液 pH5.5 (50rpm) における平均溶出曲線 (mean $\pm$ S. D.、n=12)



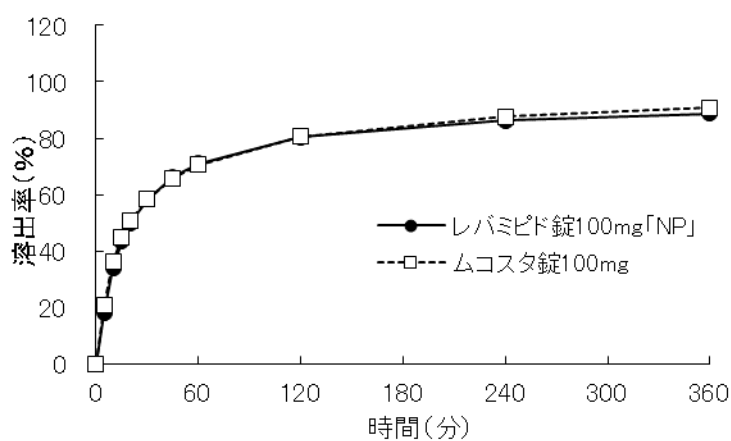
試験液 pH6.8 (50rpm) における平均溶出曲線 (mean±S.D.、n=12)



試験液 水 (50rpm) における平均溶出曲線 (mean±S.D.、n=12)



試験液 pH5.5 (100rpm) における平均溶出曲線 (mean±S.D.、n=12)



〈公的溶出規格への適合〉

方法 : 日本薬局方 溶出試験法 (パドル法)

試験液 : pH6.0のリン酸水素二ナトリウム・クエン酸緩衝液 (1→4) 900mL

回転数 : 50rpm

試験結果 : 60分以内に75%以上溶出した。

レバミピド錠 100mg「NP」は、日本薬局方医薬品各条に定められたレバミピド錠の溶出規格に適合していることが確認されている。

## 10. 容器・包装

(1) 注意が必要な容器・包装，外観が特殊な容器・包装に関する情報

該当しない

(2) 包装

### 22. 包装

100錠 [10錠 (PTP) ×10]

500錠 [10錠 (PTP) ×50]

500錠 [瓶、バラ]

1050錠 [21錠 (PTP) ×50]

(3) 予備容量

該当しない

(4) 容器の材質

PTP 包装

PTP：ポリ塩化ビニル、アルミニウム

バラ包装

容器：ポリエチレン

キャップ：ポリエチレン

## 11. 別途提供される資材類

該当しない

## 12. その他

該当しない

---

## V. 治療に関する項目

---

### 1. 効能又は効果

#### 4. 効能・効果

- 胃潰瘍
- 下記疾患の胃粘膜病変（びらん、出血、発赤、浮腫）の改善  
急性胃炎、慢性胃炎の急性増悪期

### 2. 効能又は効果に関連する注意

設定されていない

### 3. 用法及び用量

#### (1) 用法及び用量の解説

#### 6. 用法・用量

##### 〈胃潰瘍〉

通常、成人には1回1錠（レバミピドとして100mg）を1日3回、朝、夕及び就寝前に経口投与する。

##### 〈下記疾患の胃粘膜病変（びらん、出血、発赤、浮腫）の改善

急性胃炎、慢性胃炎の急性増悪期〉

通常、成人には1回1錠（レバミピドとして100mg）を1日3回経口投与する。

#### (2) 用法及び用量の設定経緯・根拠

該当資料なし

### 4. 用法及び用量に関連する注意

設定されていない

### 5. 臨床成績

#### (1) 臨床データパッケージ

該当資料なし

#### (2) 臨床薬理試験

該当資料なし

#### (3) 用量反応探索試験

該当資料なし

#### (4) 検証的試験

##### 1) 有効性検証試験

該当資料なし

##### 2) 安全性試験

該当資料なし

(5) 患者・病態別試験

該当資料なし

(6) 治療的使用

- 1) 使用成績調査（一般使用成績調査，特定使用成績調査，使用成績比較調査），  
製造販売後データベース調査，製造販売後臨床試験の内容

該当資料なし

- 2) 承認条件として実施予定の内容又は実施した調査・試験の概要

該当資料なし

(7) その他

〈胃潰瘍〉

17.1.1 国内臨床試験

胃潰瘍患者を対象にレバミピド 300mg/日を投与した試験での最終内視鏡判定は、治癒 60% (200/335 例)、略治以上 67% (224/335 例) であった。また、二重盲検比較試験において、レバミピドの有用性が認められている。更に、治癒した症例のうち 67 例を 6 カ月間追跡調査した結果、再発が認められた症例は 4 例であり、再発率は約 6% であった<sup>8) -12)</sup>。

## VI. 薬効薬理に関する項目

### 1. 薬理的に関連ある化合物又は化合物群

粘膜抵抗増強薬、粘膜産生・分泌促進薬、胃粘膜微小循環改善薬（スクラルファート水和物、アズレンスルホン酸ナトリウム水和物、テプレノン、ソファルコン 等）

注意：関連のある化合物の効能・効果等は、最新の電子添文を参照すること。

### 2. 薬理作用

#### (1) 作用部位・作用機序

##### 18.1 作用機序

##### 18.1.1 胃粘膜保護、損傷治癒促進作用

レバミピドは、内因性プロスタグランジン増加や胃粘液量増加などによる胃粘膜保護作用、損傷胃粘膜の治癒促進作用が認められている。

##### 18.1.2 胃粘膜の炎症抑制作用

レバミピドは、フリーラジカル抑制や炎症性サイトカイン産生抑制などにより胃粘膜の炎症を抑制する作用が認められている。

#### (2) 薬効を裏付ける試験成績

##### 18.2 実験胃潰瘍に対する抑制作用及び治癒促進作用

ラットにおいて、水浸拘束ストレス潰瘍、アスピリン潰瘍、インドメタシン潰瘍、ヒスタミン潰瘍、セロトニン潰瘍、幽門結紮潰瘍及び活性酸素が関与していると考えられる虚血-再灌流、血小板活性化因子 (PAF)、ジエチルジチオカルバメイト (DDC)、ストレス・インドメタシンによる胃粘膜傷害を抑制した<sup>13) -16)</sup>。また、ラット酢酸潰瘍の治癒を促進し、潰瘍作製後 120~140 日目にみられる再発・再燃を抑制した<sup>17)</sup>。

##### 18.3 実験胃炎に対する抑制作用及び治癒促進作用

ラットにおいて、胆汁酸の主成分の一つであるタウロコール酸で誘発した実験胃炎の発生を抑制するとともに治癒促進効果を有した<sup>18)、19)</sup>。

##### 18.4 胃粘膜プロスタグランジン増加作用

ラットにおいて、胃粘膜内プロスタグランジン E<sub>2</sub> 含量を増加させた。また、胃液中のプロスタグランジン E<sub>2</sub>、I<sub>2</sub> を増加させるとともに、プロスタグランジン E<sub>2</sub> の代謝産物である 15-ケト-13, 14-ジヒドロプロスタグランジン E<sub>2</sub> も増加させた<sup>20)、21)</sup>。

健康成人男性において、胃粘膜プロスタグランジン E<sub>2</sub> 含量を増加させ、エタノール負荷による胃粘膜傷害に対する抑制作用を示した<sup>22)</sup>。

##### 18.5 胃粘膜保護作用

ラットにおいて、エタノール、強酸及び強アルカリによる胃粘膜傷害を抑制した<sup>20)、23)</sup>。

健康成人男性において、アスピリン、エタノール、塩酸-エタノール負荷による胃粘膜傷害を抑制した<sup>22) -24)</sup>。

#### 18.6 胃粘液量増加作用

ラットにおいて、粘液高分子糖タンパクの生合成酵素活性を高め、胃粘膜被覆粘液量及び可溶性粘液量を増加させた。なお、可溶性粘液増加作用に内因性プロスタグランジンは関与しなかった<sup>25) -27)</sup>。

#### 18.7 胃粘膜血流量増加作用

ラットにおいて、胃粘膜血流量を増加させ、脱血による血行動態の障害を改善した<sup>23)</sup>。

#### 18.8 胃粘膜関門に対する作用

ラットにおいて、胃粘膜電位差に対してほとんど作用を示さないが、エタノールによる胃粘膜電位差の低下を抑制した<sup>28)</sup>。

#### 18.9 胃アルカリ分泌亢進作用

ラットにおいて、胃アルカリ分泌を亢進した<sup>29)</sup>。

#### 18.10 損傷胃粘膜修復作用

ウサギ培養胃粘膜上皮細胞を用いた創傷修復モデルにおいて、胆汁酸及び過酸化水素によって遅延した修復過程を正常化した<sup>30)、31)</sup>。

#### 18.11 胃酸分泌に対する作用

ラットにおいて、基礎胃液分泌にほとんど作用を及ぼさず、また、刺激胃酸分泌に対しても抑制作用を示さなかった<sup>32)</sup>。

#### 18.12 活性酸素に対する作用

レバミピドはヒドロキシルラジカルを直接消去し、多形核白血球のスーパーオキシド産生を抑制した<sup>33) -35)</sup>。また、*Helicobacter pylori*による好中球からの活性酸素種産生による胃粘膜細胞傷害を抑制した<sup>36)</sup> (*in vitro*)。ストレス・インドメタシンを負荷したラットの胃粘膜傷害を抑制すると同時に胃粘膜中の過酸化脂質含量を低下させた<sup>15)</sup>。

#### 18.13 胃粘膜への炎症性細胞浸潤に対する作用

ラットのタウロコール酸（胆汁酸の主成分の一つ）誘発胃炎モデル、NSAIDs胃粘膜傷害モデル、虚血-再灌流モデルにおいて、炎症性細胞浸潤を抑制した<sup>16)、18)、37)</sup>。

#### 18.14 胃粘膜における炎症性サイトカイン（インターロイキン-8）に対する作用

*Helicobacter pylori*によるヒト胃粘膜上皮細胞からのインターロイキン-8（IL-8）産生増加を抑制した<sup>38)</sup>。また、上皮細胞内のNF- $\kappa$ Bの活性化及びIL-8 mRNAの発現を抑制した<sup>39)</sup> (*in vitro*)。

### (3) 作用発現時間・持続時間

該当資料なし

## VII. 薬物動態に関する項目

### 1. 血中濃度の推移

#### (1) 治療上有効な血中濃度

該当資料なし

#### (2) 臨床試験で確認された血中濃度

##### 16.1 血中濃度

16.1.1 健康成人男性 27 例にレバミピド錠 100mg を空腹時単回経口投与した時の薬物動態パラメータを以下に示す<sup>40)</sup>。

レバミピドの薬物動態パラメータ

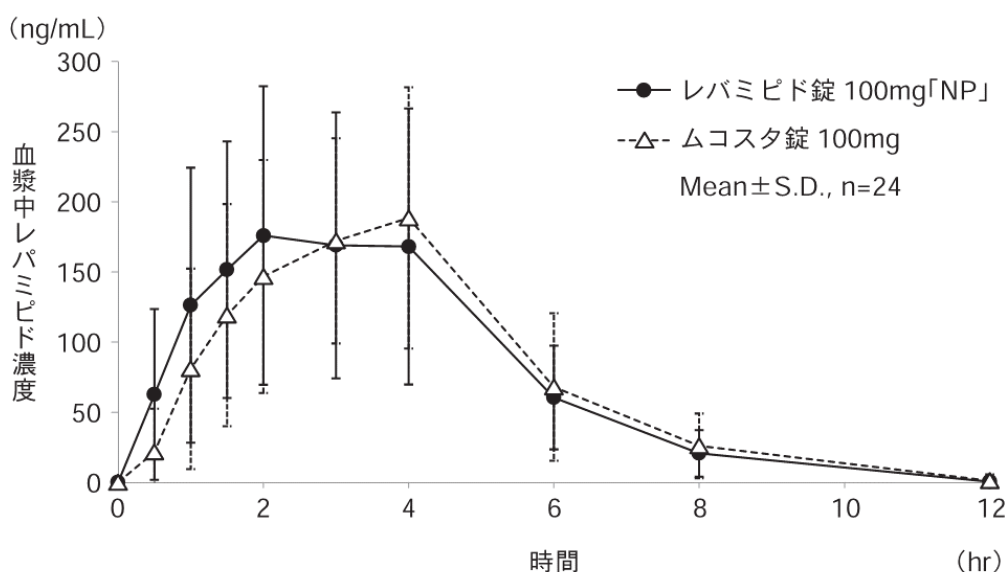
$T_{max}$ (時間)	$C_{max}$ ( $\mu\text{g/L}$ )	$t_{1/2}$ (時間)	AUC ( $\mu\text{g/L}\cdot\text{h}$ )
$2.4\pm 1.2$	$216\pm 79$	$1.9\pm 0.7$	$874\pm 209$

(平均値±標準偏差、n=27、t は 12 時間までの値より算出した)

#### 生物学的同等性試験<sup>7)</sup>

(「後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン:平成 9 年 12 月 22 日 医薬審第 487 号、平成 13 年 5 月 31 日一部改正 医薬審第 786 号、平成 18 年 11 月 24 日一部改正 薬食審査発第 1124004 号」)

レバミピド錠 100mg 「NP」とムコスタ錠 100mg のそれぞれ 1 錠 (レバミピドとして 100mg) を、2 剤 2 期のクロスオーバー法により健康成人男子に絶食時単回経口投与して LC/MS 法にて血漿中未変化体濃度を測定した。得られた薬物動態パラメータ ( $AUC_{0\rightarrow 12\text{hr}}$ 、 $C_{max}$ ) について 90% 信頼区間法にて統計解析を行った結果、 $\log(0.80)\sim\log(1.25)$  の範囲内であり、両剤の生物学的同等性が確認された。



	判定パラメータ		参考パラメータ	
	AUC <sub>0→12hr</sub> (ng・hr/mL)	C <sub>max</sub> (ng/mL)	T <sub>max</sub> (hr)	t <sub>1/2</sub> (hr)
レバミピド錠 100mg 「NP」	907.46 ± 379.96	245.10 ± 102.47	2.46 ± 1.12	1.59 ± 0.60
ムコスタ錠 100mg	892.74 ± 366.09	224.86 ± 84.28	2.96 ± 0.90	1.51 ± 0.58

(Mean ± S. D.、n=24)

血漿中濃度並びに AUC、C<sub>max</sub> 等のパラメータは、被験者の選択、体液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

(3) 中毒域

該当資料なし

(4) 食事・併用薬の影響

16.2 吸収

16.2.1 食事の影響

健康成人男性 6 例にレバミピド 150m<sup>注)</sup> を単回経口投与した時、食事により吸収の遅延傾向がみられたが、バイオアベイラビリティに影響は認められなかった<sup>41)</sup>。

注) 本剤の承認された用量は 1 回 100mg、1 日 3 回である。

2. 薬物速度論的パラメータ

(1) 解析方法

該当資料なし

(2) 吸収速度定数

該当資料なし

(3) 消失速度定数

健康成人単回経口投与

投与量	100mg (n=24)
kel (/hr)	0.498 ± 0.189

(Mean ± S. D.)

(4) クリアランス

該当資料なし

(5) 分布容積

該当資料なし

(6) その他

該当資料なし

### 3. 母集団（ポピュレーション）解析

#### （1）解析方法

該当資料なし

#### （2）パラメータ変動要因

該当資料なし

### 4. 吸収

該当資料なし

### 5. 分布

#### （1）血液－脳関門通過性

該当資料なし

#### （2）血液－胎盤関門通過性

該当資料なし

〈参考〉

「VIII. 6. (5) 妊婦」の項参照。

#### （3）乳汁への移行性

該当資料なし

〈参考〉

「VIII. 6. (6) 授乳婦」の項参照。

#### （4）髄液への移行性

該当資料なし

#### （5）その他の組織への移行性

該当資料なし

#### （6）血漿蛋白結合率

##### 16.3 分布

レバミピドのヒト血漿蛋白結合率は 98.4～98.6%であった<sup>42)</sup> (*in vitro*、限外ろ過法、0.05～5  $\mu$ g/mL)。

### 6. 代謝

#### （1）代謝部位及び代謝経路

##### 16.4 代謝

健康成人男性にレバミピド 600mg<sup>注)</sup> を経口投与した時、尿中排泄の大部分が未変化体であった。代謝産物として 8 位水酸化体が確認されたが、その量は投与量の約 0.03%とわずかであった。8 位水酸化体は CYP3A4 によって生成した<sup>2)、43)</sup> (*in vitro*)。

注) 本剤の承認された用量は 1 回 100mg、1 日 3 回である。

(2) 代謝に関与する酵素（CYP等）の分子種，寄与率

「VII. 6. (1)代謝部位及び代謝経路」の項参照。

(3) 初回通過効果の有無及びその割合

該当資料なし

(4) 代謝物の活性の有無及び活性比，存在比率

該当資料なし

7. 排泄

16.5 排泄

健康成人男性にレバミピド 100mg を投与した時、尿中に投与量の約 10%が排泄された<sup>2)</sup>。

8. トランスポーターに関する情報

該当資料なし

9. 透析等による除去率

該当資料なし

10. 特定の背景を有する患者

16.6 特定の背景を有する患者

16.6.1 腎機能障害患者

腎機能障害被験者にレバミピド 100mg を単回経口投与後の薬物動態を検討したところ、健康成人に比べ血漿中濃度の上昇及び消失半減期の遅れが認められた<sup>44)</sup>。また、透析患者に連続投与した時の定常状態における血漿中濃度は、単回投与時から推定できる血漿中濃度と一致したことより、蓄積性はないものと考えられた<sup>45)</sup>。

11. その他

該当資料なし

---

## VIII. 安全性（使用上の注意等）に関する項目

---

### 1. 警告内容とその理由

設定されていない

### 2. 禁忌内容とその理由

#### 2. 禁忌（次の患者には投与しないこと）

本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

### 3. 効能又は効果に関連する注意とその理由

設定されていない

### 4. 用法及び用量に関連する注意とその理由

設定されていない

### 5. 重要な基本的注意とその理由

設定されていない

### 6. 特定の背景を有する患者に関する注意

#### (1) 合併症・既往歴等のある患者

設定されていない

#### (2) 腎機能障害患者

設定されていない

#### (3) 肝機能障害患者

設定されていない

#### (4) 生殖能を有する者

設定されていない

#### (5) 妊婦

##### 9.5 妊婦

妊婦又は妊娠している可能性のある女性には治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること。動物実験（ラット）で胎児への移行が報告されている。

#### (6) 授乳婦

##### 9.6 授乳婦

治療上の有益性及び母乳栄養の有益性を考慮し授乳の継続又は中止を検討すること。動物実験（ラット）で、乳汁中への移行が報告されている。

#### (7) 小児等

##### 9.7 小児等

小児等を対象とした臨床試験は実施していない。

(8) 高齢者

9.8 高齢者

消化器症状等の副作用に注意すること。一般に生理機能が低下している。

7. 相互作用

(1) 併用禁忌とその理由

設定されていない

(2) 併用注意とその理由

設定されていない

8. 副作用

11. 副作用

次の副作用があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

(1) 重大な副作用と初期症状

11.1 重大な副作用

11.1.1 ショック、アナフィラキシー（いずれも頻度不明）

11.1.2 白血球減少、血小板減少（いずれも頻度不明）

11.1.3 肝機能障害、黄疸（いずれも頻度不明）

AST、ALT、 $\gamma$ -GTP、Al-Pの上昇等を伴う肝機能障害、黄疸があらわれることがある。

(2) その他の副作用

11.2 その他の副作用

	0.1～0.5%未満	0.1%未満	頻度不明
過敏症	発疹	そう痒感、薬疹様湿疹等の過敏症状	蕁麻疹
精神神経系			しびれ、めまい、眠気
消化器	便秘、腹部膨満感、下痢、味覚異常	嘔気、胸やけ、腹痛、げっぷ	口渇、嘔吐
肝臓 <sup>注)</sup>		AST、ALTの上昇	$\gamma$ -GTP、Al-Pの上昇
血液			血小板減少、白血球減少、顆粒球減少
その他		浮腫、咽頭部異物感	乳腺腫脹、乳房痛、女性化乳房、乳汁分泌誘発、動悸、発熱、顔面潮紅、舌のしびれ、咳、息苦しい、脱毛、月経異常、BUN上昇

注) トランスアミナーゼが著しく上昇した場合や発熱、発疹等が同時にあらわれた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

9. 臨床検査結果に及ぼす影響

設定されていない

10. 過量投与

設定されていない

11. 適用上の注意

14. 適用上の注意

14.1 薬剤交付時の注意

PTP包装の薬剤はPTPシートから取り出して服用するよう指導すること。PTPシートの誤飲により、硬い鋭角部が食道粘膜へ刺入し、更には穿孔をおこして縦隔洞炎等の重篤な合併症を併発することがある。

12. その他の注意

(1) 臨床使用に基づく情報

設定されていない

(2) 非臨床試験に基づく情報

設定されていない

---

## Ⅸ. 非臨床試験に関する項目

---

### 1. 薬理試験

#### (1) 薬効薬理試験

「Ⅵ. 薬効薬理に関する項目」の項参照。

#### (2) 安全性薬理試験

該当資料なし

#### (3) その他の薬理試験

該当資料なし

### 2. 毒性試験

#### (1) 単回投与毒性試験

該当資料なし

#### (2) 反復投与毒性試験

該当資料なし

#### (3) 遺伝毒性試験

該当資料なし

#### (4) がん原性試験

該当資料なし

#### (5) 生殖発生毒性試験

該当資料なし

#### (6) 局所刺激性試験

該当資料なし

#### (7) その他の特殊毒性

該当資料なし

---

## X. 管理的事項に関する項目

---

### 1. 規制区分

製 剤：レバミピド錠 100mg 「NP」 該当しない  
有効成分：日本薬局方 レバミピド 該当しない

### 2. 有効期間

3 年

### 3. 包装状態での貯法

室温保存

### 4. 取扱い上の注意

該当しない

### 5. 患者向け資材

患者向医薬品ガイド : なし  
くすりのしおり : あり  
その他の患者向け資材 : なし

### 6. 同一成分・同効薬

同一成分薬：ムコスタ錠 100mg（大塚製薬） 他  
同 効 薬：粘膜抵抗増強薬、粘膜産生・分泌促進薬、胃粘膜微小循環改善薬（スクラルファート水和物、アズレンスルホン酸ナトリウム水和物、テブレノン、ソファルコン 等）

### 7. 国際誕生年月日

該当しない

### 8. 製造販売承認年月日及び承認番号，薬価基準収載年月日，販売開始年月日

製造販売承認年月日：2009 年 1 月 8 日

[注]2013 年 12 月 2 日に製造販売承認を承継。

承認番号 : 22100AMX00051000

薬価基準収載年月日：2009 年 5 月 15 日

販売開始年月日 : 2009 年 5 月 15 日

9. 効能又は効果追加, 用法及び用量変更追加等の年月日及びその内容

該当しない

10. 再審査結果, 再評価結果公表年月日及びその内容

該当しない

11. 再審査期間

該当しない

12. 投薬期間制限に関する情報

本剤は、投薬（あるいは投与）期間に関する制限は定められていない。

13. 各種コード

販売名	厚生労働省薬価基準 収載医薬品コード	個別医薬品 コード (YJコード)	HOT (9桁) 番号	レセプト電算 処理システム 用コード
レバミピド錠 100mg「NP」	2329021F1013	2329021F1064	119039701	620009462

14. 保険給付上の注意

本剤は、診療報酬上の後発医薬品に該当しない。

---

## XI. 文献

---

### 1. 引用文献

- 1) 田中千賀子 他編集：NEW 薬理学、改訂第7版：p. 487(2017)、南江堂
- 2) 第十八改正 日本薬局方 解説書(廣川書店) C-6232(2021)
- 3) 日本薬剤師研修センター編：日本薬局方 医薬品情報 2021 (じほう) 845(2021)
- 4) ニプロ(株)社内資料：加速安定性試験
- 5) ニプロ(株)社内資料：長期保存試験
- 6) ニプロ(株)社内資料：無包装状態での安定性試験
- 7) ニプロ(株)社内資料：生物学的同等性試験 (溶出、血漿中濃度測定)
- 8) 竹本忠良ほか：臨床成人病. 1989 ; 19(4) : 539-551 (L20210450)
- 9) 竹本忠良ほか：臨床成人病. 1989 ; 19(4) : 553-582 (L20210451)
- 10) 竹本忠良ほか：臨床成人病. 1989 ; 19(5) : 739-751 (L20210452)
- 11) 竹本忠良ほか：臨床成人病. 1989 ; 19(5) : 753-775 (L20210453)
- 12) 竹本忠良ほか：臨床成人病. 1989 ; 19(7) : 1265-1291 (L20210454)
- 13) 山崎勝也ほか：薬理と治療. 1988 ; 16(5) : 1997-2005 (L20210457)
- 14) Yamasaki, K. et al. : Jpn J Pharmacol. 1989 ; 49(4) : 441-448 (L20210458)
- 15) Yamasaki, K. et al. : Pathophysiology. 1994 ; 1(4) : 251-257 (L20210479)
- 16) Kim, C. D. et al. : J Pharmacol Exp Ther. 1995 ; 275(1) : 340-344 (L20210481)
- 17) 白木正裕ほか：日薬理誌. 1988 ; 92(6) : 389-395 (L20210459)
- 18) 岡部進ほか：Ther Res. 1991 ; 12(10) : 3253-3263 (L20210460)
- 19) Kishimoto, S. et al. : Res Commun Chem Pathol Pharmacol. 1992 ; 78(3) : 259-277 (L20210461)
- 20) Yamasaki, K. et al. : Eur J Pharmacol. 1987 ; 142(1) : 23-29 (L20210462)
- 21) Kleine, A. et al. : Dig Dis Sci. 1993 ; 38(8) : 1441-1449 (L20210463)
- 22) 中村肇ほか：臨床成人病. 1989 ; 19(6) : 1109-1114 (L20210464)
- 23) 川野淳ほか：日薬理誌. 1991 ; 97(6) : 371-380 (L20210465)
- 24) Dammann, H. G. : Eur J Gastroenterol Hepatol. 1994 ; 6(10) : 911-915 (L20210466)
- 25) 石山広信ほか：薬理と治療. 1988 ; 16(10) : 4103-4109 (L20210467)
- 26) 石山広信ほか：薬理と治療. 1988 ; 16(10) : 4111-4118 (L20210468)
- 27) Ishihara, K. et al. : Arzneim-Forsch/Drug Res. 1992 ; 42(II) : 1462-1466 (L20210469)
- 28) 山崎勝也ほか：薬理と治療. 1990 ; 18(9) : 3395-3400 (L20210470)
- 29) 山崎勝也ほか：薬理と治療. 1990 ; 18(10) : 3765-3772 (L20210471)
- 30) Watanabe, S. et al. : Aliment Pharmacol Ther. 1996 ; 10(6) : 927-932 (L20210472)
- 31) Watanabe, S. et al. : Dig Dis Sci. 1998 ; 43(9) : 107S-112S (L20210473)
- 32) 山崎勝也ほか：薬理と治療. 1988 ; 16(6) : 2487-2495 (L20210474)

- 33)Yoshikawa, T. et al. :Arzneim-Forsch/Drug Res. 1993; 43(I) : 363-366 (L20210475)
- 34)Naito, Y. et al. : Free Radic Biol Med. 1995 ; 18(1) : 117-123 (L20210476)
- 35)Ogino, K. et al. : Eur J Pharmacol. 1992 ; 212(1) : 9-13 (L20210477)
- 36)Suzuki, M. et al. : Gut. 1994 ; 35(10) : 1375-1378 (L20210478)
- 37)Murakami, K. et al. : Dig Dis Sci. 1997 ; 42(2) : 319-325 (L20210480)
- 38)三原充弘ほか : 消化器科. 1997 ; 24(6) : 681-688 (L20210482)
- 39)Aihara, M. et al. : Dig Dis Sci. 1998 ; 43(9) : 174S-180S (L20210483)
- 40)Hasegawa, S. et al. : Clin Drug Invest. 2003 ; 23(12) : 771-779 (L20210444)
- 41)岸清一郎ほか : 臨床成人病. 1989 ; 19(3) : 355-363 (L20210445)
- 42)塩屋良秀ほか : 医薬品研究. 1989 ; 20(2) : 522-533 (L20210446)
- 43)Koyama, N. et al. : XENOBIOTICA. 2002 ; 32(7) : 573-586 (L20210447)
- 44)菊池博ほか : 新薬と臨床. 1995 ; 44(7) : 1179-1182 (L20210448)
- 45)深沢和浩ほか : 新薬と臨床. 1995 ; 44(10) : 1667-1671 (L20210449)
- 46)ニプロ(株)社内資料 : 粉碎後の安定性試験
- 47)ニプロ(株)社内資料 : 崩壊・懸濁性及び経管投与チューブの通過性

## 2. その他の参考文献

該当資料なし

---

## XII. 参考資料

---

### 1. 主な外国での発売状況

該当しない

### 2. 海外における臨床支援情報

該当しない

### XIII. 備考

#### 1. 調剤・服薬支援に際して臨床判断を行うにあたっての参考情報

##### 本項の情報に関する注意

本項には承認を受けていない品質に関する情報が含まれる。試験方法等が確立していない内容も含まれており、あくまでも記載されている試験方法で得られた結果を事実として提示している。医療従事者が臨床適用を検討する上での参考情報であり、加工等の可否を示すものではない。

(掲載根拠：「医療用医薬品の販売情報提供活動に関するガイドラインに関する Q&A について (その3)」令和元年9月6日付 厚生労働省医薬・生活衛生局 監視指導・麻薬対策課 事務連絡)

##### (1) 粉碎

粉碎後の安定性<sup>46)</sup>

試験項目：外観、残存率 (%)

保存条件 保存形態	試験項目	開始時	1 カ月
湿度：なりゆき 温度：室温 光：散光下 透明試薬瓶開放	外観	白色	変化なし
	残存率 (%)	100	99.8

1 ロット (n=3)、1 ロット

##### (2) 崩壊・懸濁性及び経管投与チューブの通過性<sup>47)</sup>

試験方法

- ①30mL のディスポシリンジに錠剤を入れる。
- ②55℃に温めた水道水を 20mL 吸入する。
- ③5 分間放置 (崩壊しない場合、さらに 5 分間放置する)
- ④振とう後、カテーテルに通す。

試験結果

試験条件	試験回数	放置時間	崩壊懸濁試験	通過性試験	
			観察結果	チューブサイズ	通過性及び残存
水 (約 55℃)	3	5 分	崩壊・懸濁した	8Fr.	残存なし

本試験は「内服薬 経管投与ハンドブック (株)じほう」及び「内服薬 経管投与ハンドブック 第4版 (株)じほう」に準じて実施。

#### 2. その他の関連資料

該当しない

**ニフ.ロ株式会社**

大阪府摂津市千里丘新町3番26号